

研究結果報告書

1920年代日本と朝鮮の映画交流

所属： 漢陽大学校 演劇映画学科 映画専攻
役職： 講師
氏名： 威 忠 範

本研究のテーマは「1920年代日本と朝鮮の映画交流」で、1920年代日韓の映画交流の様相を、帝国日本と植民地朝鮮間における映画の製作、配給、上映システム上に、どの程度の、また如何なる(影響)関係があったかを分析し明らかにすることを目的としている。研究はほぼ計画通りに捗り、申請書上の研究内容について次のような研究結果が導き出された。

(1) 朝鮮映画界での日本人の活動と日本映画資本の朝鮮進出の様相：1920年代朝鮮では映画製作において日本人の活動が活発であった。映画会社の設立と劇場の運営には在朝鮮日本人の活躍が目立ち、撮影技術分野では日本人の活躍が大きかった。特に日活、松竹、帝キネ、マキノ、東亜キネマなど日本の映画会社の資本が朝鮮に流入され、配給、上映部門に多くの影響を及ぼした。

(2) 朝鮮で上演された日本映画の種類：活動写真上映が定着する1910年代から、朝鮮の映画館は朝鮮人観客向けの映画館と日本人観客向けの日本人映画館に分かれていた。館主は大部分日本人であったが、朝鮮人映画館では朝鮮人弁士が朝鮮語で、日本人映画館では日本人弁士が日本語で映画を説明した。上映された映画は、朝鮮人映画館ではアメリカ映画を中心とした西洋映画(と少数の朝鮮映画)、日本人映画館では殆ど日本映画であった。また、1920年代に入ってから朝鮮の映画館が日本の映画会社にチェーン化された。京城の一流館の場合、喜楽館は日活直営、大正館は松竹共同経営、中央館はマキノ特約で運営され、当時各日本の映画会社が日本で制作した時代劇、メロドラマ、新派物、喜劇等が朝鮮の映画館でも上映された。

(3) 日本映画界での朝鮮人の活動及び、日本で上映された朝鮮映画の種類：1920年代を分析した限りでは、その数は非常に少なかった。日本で上映された朝鮮映画は、日本人によって釜山に建てられた朝鮮最初の映画会社である朝鮮キネマ株式会社製作の『海の秘曲』(1924)、『寵姫の恋』(1925)と、朝鮮で大きな反響を起こした朝鮮キネマプロダクション製作、羅雲奎(ナ・ウンギョ)監督の<アリラン>(1926)程度に過ぎない。日本映画界に進出した朝鮮人も、姜弘植(カン・ホンシク)や金一海(キム・イルヘ)など、俳優を中心に何人かいたが、現地(内地)での目につく活動や、その人気は振るわなかった。

(4) 1920年代日本と朝鮮の映画交流の特徴及び映画史的意義：課題の調査-研究の結果、韓国映画史/日本映画史という一国映画史の境界を乗り越え、東アジア映画史の観点から植民地朝鮮映画であり帝国の半島映画であった当時の朝鮮映画の二重的な特殊性及び戦前日本映画の範疇と概念について、今後さらに深く考察する必要性が再確認できた。

本研究者はこの課題での調査と研究について予定どおりの内容を行ったが、研究結果報告書は、その内の一部を例としてより具体的に述べたい。その内容は次のようである。

本稿は1920年代における植民地朝鮮で、日本人映画俳優がいかなる契機から朝鮮映画界と関係を結び、どのように活動したのか、また観客からいかなる反応を得て、大衆的にどのように認識されたのかなどについて調査したものである。

1920年代中盤、日本では映画の芸術的地位が高まり、産業体系が再編された。同時期朝鮮では、在朝鮮日本人を主な観客層とする活動写真(映画)常設館が日活、松竹など日本の有力映画製作会社によって系列化されていた。また、日本人が資本と技術を、朝鮮人が演出と演技を担当する形で映画製作活動が開始され、それと共に、映画俳優に対する大衆的人気と文化的地位が非常に高くなった。

1923年から朝鮮映画が製作-封切されたが、登場人物が日本人に設定された作品は殆ど見られなかった。そのような状況の中でも、大沢柔(おおさわやわら)という日本人俳優

が朱三孫（ジュ・サムソン）という朝鮮人の名前で活発に活動したことが目立っている。彼は 1920 年代の中盤から 1930 年代の初盤にかけて多くの朝鮮無声映画に頻りに登場し、主役を担当したことも何回かある。しかし、在朝鮮日本人の間で朱三孫の存在性は非常に微弱だった。それは「民族-言語」を境界に二元化されていた当時の植民地朝鮮における映画上映文化の影響のためだといえる。

一方、1920 年代在朝鮮日本人観客の関心は日本の映画俳優により集中していった。新聞、雑誌の演芸欄は日本俳優に関する内容で満たされていた。そのような雰囲気の中、1925 年の夏からは映画界の大スターを始めとして日本の俳優たちが京城を訪問するイベントが開かれた。そのグループの中には朝鮮出身の俳優も含まれていた。植民地朝鮮出身の日本人の俳優に対する在朝鮮日本人の関心は特に高かったとみえる。しかし、当時日本映画界に進出した朝鮮人俳優は、あまり注目されることがなかった。それは朝鮮(映画)に対する日本人の認識と視線が反映された結果であるといえる。

1920 年代、植民地朝鮮と日本人俳優という両者は、当時日本映画産業構造および製作システム、朝鮮映画興行編成および上映体系、そして大衆観客の好みなどと結びつき、重層的で多様な関係を結んでいた。これらは、映画の商業的性格と時代反映性を確認できる代表的な事例だと思われる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「1920 年代中盤植民地朝鮮と日本人映画俳優」、咸忠範、
‘植民地日本語文学/文化研究会’ コルロキオム、
2014 年 12 月 22 日 14~16 時、高麗大学日本研究センター 201 号

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「1920 年代中盤植民地朝鮮における日本人映画俳優に関する研究」(2015 年に投稿、掲載の予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)